

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-730	16-089	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p style="text-align: center;">Dietary Patterns in Relation to Cardiovascular Disease Incidence and Risk Markers in a Middle-Aged British Male Population: Data from the Caerphilly Prospective Study. 英国中年男性における循環器疾患発症および危険因子と食事パターンの関連：ケアフィリ前向き研究</p>		
執筆者		
Mertens E, Markey O, Geleijnse JM, Givens DI, Lovegrove JA.		
掲載誌		
Nutrients. 2017 Jan 18;9(1). pii: E75. doi: 10.3390/nu9010075.		
キーワード		PMID
ケアフィリ前向き研究、循環器疾患発症、循環器疾患危険因子、食事パターン、主成分分析		28106791
要 旨		
<p>目的： 循環器疾患(CVD)発症およびその危険因子と食事パターンの関連について検討した。</p> <p>方法： 1984-1988年実施のケアフィリ前向き研究に参加した者のうち1989-1993年実施の追跡調査に参加した47-67歳の男性1,838人を対象とした。頻度法により推定したベースライン時の食習慣より、主成分分析を用いて3つの食事パターン(DP1~3群)に分けた。DP1群は白食パン、バター、ラード、フライドポテト、加糖飲料を多く摂取し、全粒粉パンはほとんど摂取しない、DP2群は、豆、魚、家禽、加工赤身肉、米、パスタ、野菜を多く摂取する、DP3群は、食後の甘味、全粒粉シリアル、乳製品(チーズとバター以外)を多く摂取し、ほとんど飲酒しない食習慣をもつ。食事パターンとCVD発症の関連は、Cox回帰分析を用いて算出した。</p> <p>結果： 平均追跡期間16.6年の間にCVD発症715人、冠動脈疾患(CHD)発症402人、脳卒中発症205人を認めた。DP1群はCVD発症リスク(ハザード比(HR)1.35, 95%信頼区間(CI)1.10-1.67)および脳卒中発症リスク(HR1.77, 95%CI1.18-2.63)が有意に高かった。DP3群は、CVDリスク(HR0.76, 95%CI0.62-0.93)およびCHD発症リスク(HR0.68, 95%CI0.52-0.90)、脳卒中発症リスク(HR0.68, 95%CI0.47-0.99)が有意に低く、ベースライン時のCVDの危険因子の値も望ましい傾向を示した。DP2群はいずれのCVD発症リスクとも関連を示さなかった。</p> <p>結論： 食習慣と循環器疾患発症リスクには関連があった。</p>		